

芥川龍之介『馬の脚』考

——表層と内実——

一九二二（大一一〇）年の中国旅行後に創作された『支那遊記』や『湖南の扇』等では、『南京の基督』『杜子春』『秋山図』『奇妙な再会』等旅行前の浪漫的な作品群とは異なり、現実に材を取ったものが目立つ。また社会風刺に満ちた作品も多く見られるようになる。ここでは、同じ中国旅行後に創作された短編の『馬の脚』に焦点を当てて考察する。

『馬の脚』は、一九二五（大一一四）年に雑誌『新潮』の一月一日、二月一日の両号にわたってそれぞれ『馬の脚』・『続馬の脚』という題で発表され、後に全集（『芥川龍之介全集』昭二岩波書店）において、正・続ではなく連続した形に改められた（生前の単行本には収録されなかった作品である）。また、初出稿の前書き（ここでは冒頭部を前書きと記す）は、翌年に芥川によって削除され、岩波書店普及版や岩波書店版の全集以外の文庫本には掲載されていない。

作品は、語り手「わたし」による、忍野半三郎という日本人についての奇怪な物語である。

（前半——ほぼ初出の正編にあたる）北京の三菱に勤める平凡な日本人忍野は、ある日仕事場で頓死してしまう。同仁病院の山井博士は、忍野の死因を脳溢血と診断した。しかし、死者を振り分ける冥界で、彼の死が美華禁酒会長ヘンリイ・パレットとの人違いであったことが判明する。忍野は元の世界に送り返されることになるが、両脚が腐っていたため、支那人ら

しい冥界の役人により死んだばかりの馬の脚が取り付けられることになる。こうして忍野は蘇生するが、脚の秘密を世間や妻に知られることを恐れて煩悶する。やがて、馬の脚は馬としての本能を現し、勝手に動き出すとする。

（後半——続編にあたる）蒙古からの黄塵の吹きすさぶ三月のある日、彼は何かに追われるように躍り出し、ついに黄塵の中へ走り去ってしまう。半年後、忍野は元の家の玄関先に現れるが、脚の秘密に気付いた妻常子の嫌悪を察知し、再びどこかへと去っていく。

一 削除された前書き

『馬の脚』は、『新潮』に掲載されてから一年以上経った時点（大一一五・四）で改稿された。改稿後は、初出に用いられた「お伽噺」という言葉は、一切使われなくなる。また、初出前書きの次の一節が全て削除される。

このお伽噺の主人公は——「馬の脚」は小説ではない。「大人に読ませるお伽噺」である。「大人に読ませるお伽噺」などは認めない人もあるかも知れない。が、認めないのは誤りである。堀川保吉君は或論文の中に夙にこの妄を排斥した。（篇末に掲げたのはこの論文、——即ち

友重 幸四郎

「お伽噺並びに玩具に関する論文」の一説である。（『馬の脚』初出）

これらの他には、特に大きな改変は見られない。金香花は、この前書きの削除について、「お伽噺と違って小説は小説と云ふものの要約上、どうも「昔々」だけ書いてすましてゐると云ふ訳には行かない。そこで略時代の制限が出来て来る」（『澄江堂雜記三十一 昔』）という芥川の一文を引きながら、「現実寄り添う作品にさせるため」、時空の制限を受けないお伽噺という言葉削除したと述べている（後掲）。

確かに、作品の中盤以降においては氏が言うように現実社会の描写が増えてくる。また、時代もほぼ特定されている（明治→大正という近代）。しかし『馬の脚』において最も大きな問題は、語り手の「わたし」が、作中人物の一人として登場しているという点である。

わたしは北京滞在中、山井博士や牟多口氏に会ひ、度たびその妄を破らうとした。が、いつも反対に嘲笑を受けるばかりだった。

（『馬の脚』後半）

これでは、「昔々」という架空の世界を語るといってお伽噺は成立しなくなる。このことに芥川は後になって気付き「お伽噺」という言葉を削除したのではないか。ただ、この「お伽噺」という文言から、架空のありそうもないお話を企図したということは考えられる。現に作品に現実的な要素は存在するが、忍野の脚は末尾にいたるまで馬の脚であり（妻のお常も終盤ではその脚を目撃し認めている）、物語の基軸は、あくまで「お伽噺」の幻想世界にあったと考えられる。

しかし、「お伽噺」という言葉を削除しても、作中の齟齬あるいは矛盾は残る。語り手である「わたし」は、前半において冥界の出来事を眺め、また半三郎の内面にも立ち入り、全知的な視点を持って事の推移を物語

る。こういう語り手が、作品の途上で登場人物の一人として登場し、現実社会でただの人間として振舞う、あるいは、忍野の日記を手掛りにその情況を推し量る、というのでは物語の辻褄が合わなくなってくる。

この矛盾をどう捉えたらよいか。語り手「わたし」の外側に「書き手」（あるいは作中作者）がいて、「わたし」を含む物語全体を編集・統御している、と考えるなら、「わたし」の矛盾は解消されるようにも思われるが、しかし、そのような操作を行った場合、今度はその「書き手」をどう扱ったらよいかという問題が生じてくる。この作品は、措提した「書き手」と「わたし」の間に距離を設け「書き手」が「わたし」の有り様を批評する、という仕組みにはなっていない。

やはり、これらは作品の瑕疵と捉えたい。この作品には他にいくつかの瑕疵や難点が存在する。例えば、忍野の「馬の脚」が自宅で勝手に暴れだし、その後半三郎は失踪するが、その直前に「彼は三十分の後、畢に鎖の断たれる時は来た。（中略）半三郎を家庭へ縛りつけた人間の鎖が断たれる時である。」という件がある。この場面以前に、というより作中全体に家庭の束縛というものは描かれず、夫婦間の軋轢や諍いもない。半三郎に、「人間の鎖」によつて家庭に「縛りつけ」られているという意識もない。したがつて「鎖の断たれる時は来た」という表現は、いかにも唐突で不自然である。「平々凡々たることを極めてゐる」という夫婦の日常であり、忍野はこの平凡さを楽しんでもいる。また、「家庭へ縛りつけた」というなら、作品後半で、なぜ忍野は妻のところから自ら戻つて来たのか。更に、「わたし」が作中人物の一人として登場する、ということと同じ形で、この幻想的な作品世界に「岡田三郎」という実在の人物名が登場する、ということも、読者としては戸惑いを覚える（実在のものには他にもいくつか出てくる）。これらの齟齬や矛盾を芥川は察して、生前の単行本にはこの「馬の脚」を掲載しなかったのではないか。

これらの瑕疵や粗雑な描写、不自然な展開等から、この『馬の脚』は、

芥川文学の中ではマイナーな作品として位置づけられる。しかし、この作品には、芥川晩年のある特殊な心情が溢れているように思われる。そのことを見ていきたい。

二 典拠

その前に、作品の典拠について考えてみたい。前章で述べたように、このお話は、主人公忍野半三郎が、冥界での手違いで馬の脚を付けられて元の世界に蘇生する、という奇怪なストーリーが軸になっている。

この『馬の脚』の典拠研究では、たとえば吉田精一は「ゴオゴリ『鼻』からヒントを得た」(注①)と指摘した。また、中村真一郎は「カフカ張り」(注②)の幻想的な変身譚であると述べ、宮崎由子は、スウィスト『ガリバー旅行記』の影響を主張した(注③)。中国説話の転生譚との関わりを研究した論考も数点見られるが、中で、須田千里「芥川龍之介『第四の夫から』と『馬の脚』(『光華日本文学』一九九六・八)で指摘されている「士人甲」は、「別人の肉体をそっくり借りるのではなく、その一部分を自分の肉体の一部に付け替える、という話の特殊性」において、典拠としては有力な候補であると思われる(注④)。

以下に、芥川が参照したと思われる『幽明録』(七〇)中の「士人甲」を掲げる。

〔現代語訳〕 晋の元帝の時代のこと。仮に名を甲とする人物がいた。名門の一族の人である。その甲が突然病死してしまった。甲は人に連れられて天界に行き、司命に面会した。司命が改めて帳簿を調べてみると、甲の寿命は尽きておらず、冥界に連れてくるべきではなかったことが判明した。担当の冥吏は甲を人間界に帰らせようとした。だが、甲の足はひどく痛み、歩くことができないため、帰れそうもない。数人の冥吏と一緒に悩み、相談しあった。「甲がもし足の痛みのために死んだままになってしまったら、俺たちが寿命の残っている人を死なせたとお咎めを受けてしまう。」そこでぞろぞろと連れだつて行き、司命に状況を詳しく報告した。司命はしばらく考えた末に口を開いた。「ちやうど

新しく冥界に召した胡人の康乙というものが、今西門の外にいる。この胡人は死ぬ運命にあるのだが、足はすこぶる健康な状態なので、この胡人の足と取り替えてしまえば、お互いに損はないだろう。」冥吏はその指示を受けて退出し、二人の足を取り替えようとした。胡人は姿が非常に醜く、足はとりわけ気持が悪かった。甲はどうしても胡人の足を受け入れようとしなない。官吏が、「あなたがもし足を取り替えなければ、ここにずっと留まることになるだけですよ。」と言ったので、しぶしぶ承知した。冥吏は二人一緒に目をつむらせた。一瞬にして二人の足はそれぞれ入れ替わってしまった。そうして、甲は人間界に戻されると、すぐさま生き返った。甲はこの次第を家族に説明した後、服を脱いで足を見てみると、本当に胡人の足に変わっていた。(以下略)

〔原文〕

晋元帝世、有士人者、衣冠族姓。暴病亡。司命吏推校、算歷見人將上天、詣司命。未_レ尽、不_レ應_二枉召_一。主者発_レ遣令_レ還。甲尤_レ脚痛、不_レ能_レ行。無_レ緣_レ得_レ歸、主者數人共愁、相謂曰、甲若卒以_二脚痛_一不_レ能_レ歸、我等坐_二任人之罪_一。遂相率具白_二司命_一。司命思_レ之良久、曰、適新召_二胡人康乙者_一、在西門外。此人當_レ遂_レ死、其脚甚健。易_レ之、彼此無_レ損。主者承_レ勅出、將_レ易_レ之。胡形体甚醜、脚殊可_レ惡。甲終不_レ肯。主者曰、君若不_レ易、便長決_レ留此耳。不_レ獲_レ已、遂聽_レ之。主者令_二二人並閉_レ目。倏忽、二人脚已各易矣。仍即遣_レ之、豁然復生。具為_二家人_一說、發視、果是胡脚、叢毛連結、且胡臭。甲本土、愛_レ翫_二手足_一、而忽得_レ此、了不_レ欲_レ見。雖_レ獲_レ更活、每惆悵殆欲_レ如_レ死。傍人見_レ識此胡者、死猶未_レ殯、家近在_二茄子浦_一。甲親往視_二胡尸_一、果見_二其脚著_二胡体_一。正当_二殯斂_一、對_レ之泣。胡兒並有_二至性_一。每_二節朔_一、兒並悲思、馳往抱_二甲脚_一号咷。忽行_レ路相遇、便攀_レ援啼哭。為_レ此每_二出入時_一、恒令_二人守_レ門、以防_二胡子_一。終身憎_レ穢、未_レ嘗_レ候視。雖_二三伏盛暑_一、必復重_レ衣、無_二暫露_一也。

* 「原文、現代語訳ともに「中国古典小説選2 搜神記・幽明録・異苑他〔六朝I〕」(明治書院二〇〇六・一一)による。」

「士人甲」では、結局足は胡人（西域の異民族）のものに取り替えられるが、足にはすね毛がひどく生え、胡人特有の臭いもして甲は鬱々とした日を送る。その後、死んだ胡人の息子達が父親のことを思い、命日のたびに甲のところに馳せ参じ甲の足を抱いて声をあげては泣くので辟易する、という内容になっている。

ともあれ、人間の足と馬の脚という違いはあるが、冥界での手違いで足（脚）のみが取り替えられ、現世に戻ってからその脚に悩まされる、という類似性から、この「士人甲」が『馬の脚』執筆のヒントになったことは否めないのではないか。ただ、前半から後半へと作品世界の転機となった黄塵（北方からの風埃）は、「士人甲」には見当たらない。この点も含めて、芥川『馬の脚』は、「士人甲」とはかなり異なった芥川独特の展開をみせることになる。

三 評価

論の代表的なものを、カテゴリーごとに次に掲げる（むろん実際にはこのようなカテゴリーごとの整理には無理がある）。いうまでもなく、「反戦」や「社会風刺」は体制や社会への批判であり、「アイロニー」は外部への批判だけではなく、夫婦や自己の有り様等内面への省察にもつながる。そして、多かれ少なかれどの要素も『馬の脚』には当てはまる。ただ「反戦」（孔月）については、一九二四（大一一）年の『桃太郎』に通じるような反戦意識が存在したかどうかは疑わしい。

後述するが、「コント」に注目した藤井貴志の論は、筆者には作品の枠組みを考えるうえで特に参考になったものである。

反戦

(1) 「馬の脚」を取り付けるといふ奇妙な場面の設定は、忍野半三郎の内

部に秘められていた帝国日本の欲望の露呈を寓意している（孔月）注④

社会風刺

(1) 「共に政府御用の「順天時報」と三菱会社とのコンビにも、国家体制を諷刺する作者の寓意が込められている。」（邱雅芬）注⑤

(2) 「早春」にしても『馬の脚』にしても、恋人なり妻なりを通路にして世の中に対する幻滅を語つてゐる。」（進藤純孝）注⑥

(3) 「わたし」がいつも（正常者）たちの反対の嘲笑を受けるばかりでいても、敢えて半三郎の馬の脚や彼の日記を信じる立場を貫こうとすることは、偽善に満ちた現実社会や（正常者）たちの無思慮さを真正面から反論するのではなく、（この世）を見るスタンスを無意識の幻想世界に移動させ、（その世）から現実世界に存在する問題点や弊害を逆照射するといふ趣意が窺える。」（金香花）注⑦

(4) 『馬の脚』の『ガリバー旅行記』からの影響を指摘し、両作品の比較によって『馬の脚』が諷刺作品である可能性を提示した。「馬の脚」は半三郎を馬化させる装置であり、「馬の脚」が象徴するものは「被支配者の支配者に対する反乱」であると主張した。国策としての「家族主義」（当時の道徳家は国家の繁栄のために個人を犠牲にして国家に奉仕する「家族主義」を唱えた）を、「順天時報」の牟多口の「発狂禁止令」という明らかにナンセンスで非人道的な主張と並べる事で、「家族主義」への諷刺、ひいては当時の道徳観に対する批判を行ったとした。この作品は物語を語る「わたし」をも相対化する構図を持つていと論じた。

（要旨・宮崎由子）注⑧

(5) 寡黙な主人公忍野半三郎の名字は「唾」に通じる。忍野の妻は美人でも醜婦でもなく、いつも微笑を浮かべ「平々凡々」であるがゆえの「常子」である。後に半三郎から藪医者、泥棒、大詐欺師呼ばわりされる同仁病院長山井博士の「山井」は「病」の寓意であり、「難を去つて易に

就く」という「順天時報」主筆牟田口は「無駄口」に通じている（これは多くの研究者が指摘している）。

コント

(1)「大正十三年後半における岡田の一連のコント論が、芥川の中でコント作家としての自らに対する援護射撃に映ったであろうことは想像に難くない。そしてその流れの中で、岡田への明確な返答として、「小説ではない」「大人に読ませるお伽噺」を芥川は発表する。（中略）つまり「馬の脚」は、「コント風のものを書いてみました、出来はいかががでしようか？」という岡田への応答でもあるのだ。」

「岡田はここでもやはり、「人生を如実に描くのではなく」「機知、機構、諷刺、皮肉、解剖、総合・等、あらゆる知的作用をはたらかせて、人生を批評し、その批評の結果たる新しき人生を、作品に具現する」ものこそコントであると説く」（藤井貴志）注⑨

アイロニー（運命・官僚主義・自己・家族・恋愛に対するアイロニー）

(1)「馬の脚」には、言葉の端々に何かしらのアイロニー（運命・官僚主義・自己・家族・恋愛）が漂っていることは一読して判明する。しかもそれは、読み手によって様々に変化をきたすのである。そうした印象を与えるのは、やはり「馬の脚」には決定的な批判対象というものが存在しないことを意味しているのではないだろうか。「馬の脚」におけるアイロニーとは、目的不在の中途半端なものであることは疑いない。もしそこに目的というものがあるとするならば、それは、結局のところ自分自身に対するデグウにほかならないであろう。（藪下明博）注⑩

(2)「馬の脚」の主題は、自らが制御できない異物（殊に動物的本能）を内に抱え込んだ男と他者との相互の隔たりを、夫婦関係において語ったものと考えられる。そして、これを形象化する枠組として中国志怪「土

人甲」は用いられたのであり、この主題と枠組が相具することで「大人に読ませるお伽噺」（寓話）となり得たのであった。」（須田千里）注⑪

(3)「発狂する権利」「発狂したる罪」には、芥川自らのおのきも伴う寓意がある。自らの発狂への恐怖と微妙にバランスを保ち、あるいは表裏をなす発狂願望、逃亡願望ひいては自殺願望である。「馬の脚」、「早春」、「死後」に一貫するものは恋人および妻の心がわりであり、人間のつながりのもろさ、それからくる「幻滅」と孤独である。以上のような社会主義、家族主義への寓意、批判とジャーナリズム批判、社会への「幻滅」、孤独といった問題のほかには権威への寓意、批判がある。」（國末泰平）注⑫

(4)「主人公の冥界で接合された馬の脚は、（馬脚）（隠すべき真相）の暗喩であり、「運命」に授けられた秘密のメタファーでもある。従って、この作品は、自らの（馬脚）を包み隠すべく能事を尽くしたあげく、狂気の暴走に追い詰められた主人公の寓話として読むことができる。「少年」（大正十三年四月『中央公論』）の一作で生まれた自己の出自へ遡行する内部のモチーフと、素裸になれとの文壇の要請とが重なったところに、狂気の母という問題が告白のテーマとして浮上してくるのは当然の成り行きで、当人にとつての禁忌であるからこそ、告白を要請された時、そのためらいは内実が（馬脚）であるという屈折を生み出すことになる。」（秦剛）注⑬

(5)「半三郎のなかで失われたものは、実は本来の人間としての身体でも人間としての心でもない、半三郎自身が考える、人間の共同体としての帰属すべき場所ではなかっただろうか。（中略）（我）の変容によって半三郎的存在にもたらされるものは、あらゆるものとの関係性から切り離されることで生じる、絶対的孤立の不安なのではないだろうか。」（阿部寿行）注⑭

四 表層と内実

1、表層（コントの世界）

先にも述べたように、『馬の脚』の末尾近くには「岡田三郎」という実在の人物名が登場する。半三郎が再び常子の前から姿を消した後の場面で、その名は次のような形で出てくる。

マネエヂヤア、同僚、山井博士、牟田口氏等の人々は未だに忍野半三郎の馬の脚になつたことを信じてゐない。のみならず常子の馬の脚を見たのも幻覚に陥つたことと信じている。わたしは北京滞在中、山井博士や牟田口氏に会ひ、度たびその妄を破らうとした。が、いつも反対に嘲笑を受けるばかりだつた。その後、——いや、最近には、小説家岡田三郎氏も誰かからこの話を聞いたと見え、どうも馬の脚になつたことは信ぜられぬと言ふ手紙をよこした。岡田氏は若し事実とすれば、「たぶん馬の前脚をとつてつけたものと思ひますが、スベイン速歩とか言ふ妙技を演じ得る逸足ならば、前脚で物を蹴る位の変り芸もするかも知れず、それとても、湯浅少佐あたりが乗るのでなければ、果して馬自身でやり了せるかどうか、疑問に思はれます」と言ふのである。（『馬の脚』後半）

小説家岡田三郎は、心境小説全盛の大正期の文壇に、日本にコントを紹介し広めた人物とされている。この岡田のコント論は、次のようなものであった。

コントといへば、話しか物語りとかいふのが本来の意義でもあら

うか思ふ。たゞし、話とか物語りとかいつても、特に、全然現実的なものを避け、虚構空想の世界を語るものをさして、コントといふのであらう。だから、コントとだけいつても、それには既におとぎ話とでもいふほどの意義が含まれてゐるものと解釈すべきではないかとさへ思われる。（『コントと短編小説』報知新聞大十三・八）

藤井貴志によれば、「虚構空想の世界を物語る」「おとぎ話し」をコントの「本来の持前」とする岡田の記述は、そのまま『馬の脚』前書きの「大人に読ませるお伽噺」に呼応する（前掲）。氏が「岡田の一連のコント論が、芥川の中でコント作家としての自らに対する援護射撃と映つたであろうことは想像に難くない。そしてその流れの中で、岡田への明確な返答として、「小説ではない」「大人に読ませるお伽噺」を芥川は発表する」（前掲）と述べるように、芥川は岡田のコント論を意識しつつ、「大人に読ませるお伽噺」を著したものと思われる。

物語『馬の脚』は、岡田がいう「機知、機構、諷刺、皮肉、解剖、綜合・等、あらゆる知的作用をはたらかせて、人生を批評」とするという姿勢に合致し、官僚主義、家族主義、ジャーナリズム等に対する、諷刺やアイロニーに溢れたものになっている。作品世界に照らしているなら、半三郎の馬の脚をめぐる悲惨なドタバタ劇が、読者からみて滑稽であればあるほど、「あんな癡医者に何がわかるか？ あいつは泥棒だ！ 大詐欺師だ！」というように、権威や官僚、ジャーナリズムへの批判は強くなっている。

そして、以上のようなコントの理念のもとに、枠組みとして、「虚構空想の世界」としての『幽明録』中の「士人甲」が用いられたのではないか。「士人甲」から「馬の脚」というヒントを得て、それを芥川流のコントの創作『馬の脚』に使用したものと考えられる。

ちなみに、右のような作品の表層に関連するものとして、当時の芥川独自のアイロニーに裏打ちされた、いわゆる「保吉もの」（コント風の私小

説と呼ばれている大正一―一四年の作品群)の世界もあった。削除された前書きには「大人に読ませるお伽噺」などは認めない人もあるかも知れない。が、認めないのは誤りである。堀川保吉君は或論文の中に夙にこの妄を排斥した。」とあり、堀川保吉の名も登場する。

2 内実(夫婦間の情愛・自己へのデグウ)

作品は、後半(初出の続編)に入ると、忍野夫婦に焦点が絞られ、その悲劇性が目立つようになってくる。同時に、アイロニーは半三郎や夫婦の有り方にも繫ってくる。特に、後半における、秘密を抱えて苦悩しながら生きねばならない主人公へのアイロニー、半三郎に即しているなら、自己へのデグウ(嫌悪)を認めることができる。

三月の末のある午頃、半三郎は突然彼の脚の躍ったり跳ねたりするのを発見する。なぜ急に脚が騒ぎ出したか彼には判然としない。語り手は、その理由を次のように推測する。

当日は、激しい黄塵だった。黄塵とは蒙古の春風の北京へ運んで来る砂埃りである。(中略)半三郎の馬の脚は徳勝門外の馬市の斃馬についてゐた脚であり、その又斃馬は明らかに張家口、錦州を通つて来た蒙古産の庫倫馬である。すると彼の馬の脚の蒙古の空気を感ずるが早いか、忽ち躍つたり跳ねたりし出したのは寧ろ当然ではないであらうか?且又當時は塞外の馬の必死に交尾を求めながら、縦横に駆けまはる時期である。して見れば彼の馬の脚がちつとしてゐるのに忍びなかつたのも同情に値すると言はなければならぬ。(『馬の脚』)

半三郎の馬の脚は、もともとは「蒙古産の庫倫馬」に付いていた脚である。したがって、「交尾」を求めて、ということもあるが、何より北京の

北にあたる蒙古からやつてくる砂埃に故郷の空気を感して、馬の脚は躍つたり跳ねたりしたのである。

半三郎は、常子が待つ家に戻つても、脚の動きを抑えることができない。ついには荷造りに使う細引きで長靴の両足を縛り始めるが、震えは収まりそうもない。夫の異様な様子を見て、常子の心に「発狂」への恐怖が兆すが、彼女は「夫を励はるやうに、又夫を励ますやうに」様々なことを話しかける。

彼等は互に抱き合つたなり、ちつと長椅子に坐つてゐた。半三郎の脚はその間も勿論静かにしてゐる訳ではない。細引にぐるぐる括られたまま、目に見えぬペダルを踏むやうにやはり絶えず動いてゐる。常子は夫を励はるやうに、又夫を励ますやうにいろいろのことを話しかけた。

「あなた、あなた、どうしてそんなに震へていらつしやるんですか?」

「何でもない。何でもないよ。」

「だつてこんなに汗をかいて、――この夏は内地へ帰りませうよ。ねえ、あなた、久しぶりに内地へ帰りませうよ。」

「うん、内地へ帰ることにしよう。内地へ帰つて暮らすことにしよう。」

そしてこの後、屋外に出た半三郎は「身震ひを一つすると、丁度馬の嘶きに似た、気味の悪い声を残しながら、往來を罩めた黄塵の中へ」と走り去る。

半三郎の失踪をめぐるのは、夫の事情を知らない常子も含めて、マネージャー、同僚、山井博士、「順天時報」の主筆等は発狂の為と解釈し、「順天時報」の牟田口にいたっては、「夫れわが金甌無欠の国体は家族主義の

上に立つものなり。家族主義の上に立つものとせば、一家の主人たる責任の如何に重大なるかは問ふを待たず。この一家の主人にして妄りに発狂する権利ありや否や？」などと、いふ妄言を社説によって公にする。

しかし、失踪してから半年ばかりたった後、常子は夫の「脚」の秘密を知ることになる。ある日、もの思いに耽る常子の前に半三郎が現れる。

十月の或薄暮である。常子は茶の間の長椅子にぼんやり追憶に沈んでゐた。彼女の唇はもう今では永遠の微笑を浮かべてゐない。彼女の頬もいつの間にかすつかり肉を失つてゐる。彼女は失踪した夫のことだの、売り払つてしまつたダブル・ベットのことだの、南京虫のことだのを考へつゞけた。すると誰かためらひ勝ちに社宅の玄関のベルを押しした。

(中略)

常子は息を呑んだまま、少時は声を失つたやうに男の顔を見つめつづけた。男は髭を伸ばした上、別人のやうに糞れてゐる。が、彼女を見てゐる瞳は確かに待ちに待つた瞳だつた。

「あなた！」

常子はかう叫びながら、夫の胸へ縋らうとした。けれども一足出すが早いのか、熱鉄か何かを踏んだやうに忽ち又後ろへ飛びすさつた。夫は破れたズボンの下に毛だらけの馬の脚を露はしてゐる。

「あなた！」

常子はこの馬の脚に名状出来ぬ嫌悪を感じた。しかし今を逸したが最後、二度と夫に会はれぬことを感じた。夫はやはり悲しさうに彼女の顔を眺めてゐる。常子はもう一度夫の胸へ彼女の身体を投げかけようとした。が、嫌悪はもう一度彼女の勇気を圧倒した。

「あなた！」

彼女は三度目にかう言つた時、夫はくるりと背を向けたと思ふと、

静かに玄関をおりて行つた。常子は最後の勇気を振り、必死に夫へ追ひ縋らうとした。が、まだ一足も出さぬうちに彼女の耳にはひつたのは憂々と蹄の鳴る音である。常子は青い顔をしたまま、呼びとめる勇気も失つたやうにぢつと夫の後ろ姿を見つめた。それから、——玄関の落ち葉の中に昏々と正気を失つてしまつた。

作品の、特に後半(続篇)の世界は、いふなれば半三郎と妻お常の物語である。語り手は、夫の失踪により今はもう「微笑」も消え、「頬もいつの間にかすつかり肉を失つて」いる常子を見ている。右引用にあるように、半三郎は、半年後におそらく己の意志でこのお常のもとに帰つて来る。再会の場面で、妻は懐かしい夫に縋らうとするが、馬の脚への嫌悪から身体を投げかけることができない。常子は三度縋らうとした。三度目には「最後の勇気を振り、必死に」追ひ縋らうとした。しかし、妻の脚への嫌悪を察知した半三郎は、妻に背を向けて再び去つていく。

妻との関係については、國末泰平の「(同年の)『馬の脚』」、「早春」、「死後」に一貫するものは恋人および妻の心がわりであり、人間のつながりのもろさ、それからくる「幻滅」と孤独である(注⑫)という見解がある。当時の「結婚生活といふものは幻滅」(注⑮)という芥川自身の発言もある。確かに、作家芥川においては、女性あるいは妻や家庭に対する幻滅や失望といったものはあつたと思われる。しかし、『馬の脚』では、妻を忌避する、あるいは妻から逃走する、妻を忌まわしく思う、という負の感情は確認できない。むしろ、語り手は常子の心の葛藤にも触れ、一方では「夫は悲しそうに彼女の顔を眺めて」とあるように、半三郎の妻への情愛を語る。

このような後半の世界は、芥川も愛読したという『文選』の、次のような夫婦間の情愛に通じる。(注⑯)。「傍線筆者」

*「原文、書き下し文、現代語訳、注釈ともに「中国名詩選（上）」（一九八三・九岩波書店）による。」

『文選』所収「古詩十九首」の第一首。

無名氏

行行重行行

行き行きて重ねて行き行く、

與君生別離

君と生きながら別離す。

相去萬餘里

相去ること万余里、

各在天一涯

各々天の一涯に在り。

道路阻且長

道路阻しく且つ長し、

會面安可知

会面安くんぞ知る可けん。

胡馬依北風

胡馬は北風に依り、

越鳥樂南枝

越鳥は南枝に樂く。

今日も明日もあなたは旅路を重ねて、とうとう生き別れになってしまった。ふたりはたがいに遠く離れ、それぞれ天の一方に暮らすことになった。道中は険しくまた長く、いつになつたら会えることやら。でも胡の馬は北風に向かつていななき、越の鳥は南側の枝を選んで巢をかけるというものを。

〔胡馬・越鳥の句〕「胡」は北方の異民族匈奴の、「越」は江南の江蘇・浙江の地域の古称。鳥獸でさへ故郷を慕う、という意味。

相去日已遠

相去ること日に日に遠く、

衣帶日已緩

衣帯、日に日に緩し。

浮雲蔽白日

浮雲、白日を蔽い、

游子不顧返

游子、顧返せず。

思君令人老

君を思えば人をして老いしむ、

歲月忽已晚

歲月、忽ち已に晩る。

棄捐勿復道

棄捐して復た道うこと勿からん。

努力加餐飯

努力して餐飯を加えよ。

お別れしてからずいぶん日がたちました。わたしは身もやせ細って、帯は日ましにゆるくなり、浮雲が太陽を覆いかくすように、あなたはわたしの前から姿を消して、ふりむきもせず旅に出て行ってしまった。あなたのことが気がかりでわたしは老けこみ、歲月はたちまち暮れて行きます。

この古詩には、「遠く旅する夫を思う妻の嘆き」が歌われている（夫の立場から歌ったものとする説もある。また、前半は夫の、後半は妻の思いを歌ったものとする解釈もある）。妻の嘆きは、胡の馬が北方から吹いてくる風に向かつて嘶くことで、更に哀切なものになっている。そしてこの古詩の妻も、夫との別れによって「身もやせ細って、帯は日ましにゆるく」なっている。むしろ古詩の場合は旅の別れであり、『馬の脚』は夫の身体の異変に拠る別れだが、両作ともに北方からの風（埃）が係わっている。特に『馬の脚』では、「彼の馬の脚の蒙古の空気を感ずるが早いのか、忽ち踊つたり跳ねたりし出したのは寧ろ当然ではないであらうか？」とあるように、蒙古からの黄塵（埃）が契機となって物語は終盤の半三郎の失踪、夫婦の別離へと傾斜する。

『馬の脚』の枠組みは『幽明録』の「士人甲」に拠る（コント風にアレンジされている）と考えられるが、北方からの風は「士人甲」にはなく、『文選』に見られるものである。また『文選』の古詩の馬は「胡馬」で、「士人甲」では付け替えられた足の元の持ち主は「胡人」、そして芥川『馬の脚』では「蒙古の馬」となっている。

先に述べたように、『馬の脚』と同時代の芥川の作品に、『早春』（大一一四・一）と『死後』（大一一四・九）がある。これらの作品には、「恋人や妻の心がわり」からくる「幻滅」や「孤独」が表れている（前掲國末）。しかし、『馬の脚』での脚露見後のお常の行為は、「心がわり」とは言えない。なぜこういう形になったのか。一つには、この作品が小説ではなく「物語（コント）」だから、夫婦の情愛・別離という物語らしい結末を選んだ、ということが考えられる。他に、『馬の脚』では、己への強いデグウ（秘密を抱えて生きねばならない生への嫌悪）のために、女性への幻滅ではなく、妻への同情、別離による夫婦の悲哀という形に繋がった、ということも考えられる（『早春』や『死後』の主人公に、自身へのデグウという感情はない）。

〔注〕

- ① 吉出精一「芥川龍之介研究」筑摩書房一九六一
- ② 中村真一郎「芥川龍之介の世界」岩波書店二〇一五、一一一
- ③ 須出千里によれば、典拠は、『幽明録』を典拠とする『太平広記』三七六「再生」の第八話「土人甲」、または『唐代叢書』所収『再生記』の「土人甲」であるという。両書は、いくらかの字句の異同はあるが、ほぼ同一である。
- 注⑩参照
- ④ 孔月「芥川龍之介の『馬の脚』における帝国日本の表象——その寓意・諷刺をめぐって——」『文学研究論集』筑波大学比較・理論文学会二〇〇四・三
- ⑤ 邱雅芬「中国旅行後の芥川龍之介文学『馬の脚』の世界」九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会二〇〇四・六
- ⑥ 進藤純孝「芥川龍之介」河出書房一九六四・一一
- ⑦ 金香花「芥川龍之介『馬の脚』論——狂人の日記を信じる『わたし』の再考——」日本近代文学会春季大会発表資料二〇一八・五
- ⑧ 宮崎由子「芥川龍之介『馬の脚』——理性への反抗——」芥川龍之介研究」横浜・国際芥川龍之介学会事務局二〇一一
- ⑨ 藤井貴志「『馬の脚』——生はべつのところにある——」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂二〇一〇・一一
- ⑩ 藪下明博「『馬の脚』或は、幻想とアイロニーの共存」『芥川龍之介・第二号』洋々社一九九二・四
- ⑪ 須田千里「芥川龍之介『第四の夫から』と『馬の脚』——その典拠と主題をめぐって——」『光華日本文学』光華女子大学日本文学会一九九六・八
- ⑫ 國末泰平「芥川龍之介の文学」和泉書院一九九七・六
- ⑬ 秦剛「告白」を對象化した（お伽噺）『国語と国文学』東京大学国語国文学会一九九二・二
- ⑭ 阿部寿行「芥川龍之介『馬の脚』ノート——解体される（我）・構築される（我）」『青山語文』青山学院大学日本文学会二〇〇一・三
- ⑮ 「恋愛と夫婦愛とを混同しては不可ぬ」「婦人グラフ」（一九二四（大正一三）年五月）に「或る恋愛小説——或は「恋愛は至上なり」——」の表題で掲載。

⑯ 芥川の「手帳」には、「文選」も記されている（一九七八版『芥川龍之介全集 十二』手帳六）